

[久留米大学]

つどいの広場「えみくる」における 子育て支援

大谷 朝 久留米大学人間健康学部教授

1 「えみくる」の概要

「えみくる」は、久留米大学御井キャンパスに2023年に開室したばかりの子育て支援施設である。久留米市の「つどいの広場」事業の補助を受け、人間健康学部総合子ども学科が運営している。利用者や学生等から愛称を募集し、「久留米大学が多くの方の微笑みが見られる場所になるように」という意味が込められた「えみくる」が選ばれた。

「えみくる」は、おおむね0歳から3歳までの子どもとその家族が、予約不要で自由に遊ぶ場である。保育士や幼稚園教諭などの専門性をもつスタッフが週3日程度常駐し、地域の親子を

迎えている。また、地域の親子だけでなく、乳幼児を育てる教職員にも利用されている。その意味では大学の福利厚生施設の機能も果たしうる場であると言える。

「えみくる」は、地域連携センターが入る建物「つながるめ」の中にある。「つながるめ」には、誰でも自由に利用できるフリースペース、調理や飲食が可能なキッチン・カフェスペースなどがあり、地域社会の様々なつながりを生む空間としてデザインされている。「地域に開かれた大学であることが学生の学びの質を高める」との認識に立ち、地域の交流を促す様々なイベントや授業等に活用されている。「つながるめ」の中に「えみくる」があることは、「地域で子育てをする」風土を醸成することにつながるものと考えている。

2 「えみくる」を設置した3つの意義

「えみくる」には3つの意義がある。

1つ目は、地域課題の解決に向けた具体的な取り組みの場であること。核家族化や地域社会のつながりの希薄化が進行する中で、育児の悩みを抱えたまま誰にも相談できずにいる保護者がいる。子育て家庭への支援を目指

し、総合子ども学科の教員が持つ専門性を活かした地域貢献のひとつのあり方として、「えみくる」を開室した。

2つ目は、学生と教員の学びの場として有効に機能していること。「えみくる」では、保育者や教育者を目指す総合子ども学科の学生が、教員やスタッフの指導の下、親子遊びの計画を立てたり、託児の補助を行ったりしている。それらを通して、一人ひとりの子どもへの理解を深め、保育の計画と実践に必要な力を身につけていく姿が見られる。実習中に保護者支援を学ぶ機会は多くはないが、「えみくる」で乳幼児連れの保護者と接する中で、保護者から育児の喜びや苦勞を聴き、保育者として何ができるかを考える機会にもなっている。教員にとっても、子育て中の保護者や家族の地域社会への要望を、スタッフとの情報交換を通して知ることができる大変貴重な場となっている。

3つ目は、地域に開かれた教育の場であること。「えみくる」では事業の一環として「子育て支援講座」を託児つきで開講している。これは、保護者に加え、地域の保育関係者等、多くの人に大学の学びを提供するだけでなく、教員の研究成果を發揮する貴重な機会でもある。

3 今後の展望

開室2年目となる2024年度は、親子がより快適に過ごせるよう、施設面積の拡張を予定している。大学において、教職員、学生が地域と密接につながることを通して、「誰がやっても大変な子育て」に対して、「えみくる」が間接的にでも「保護者が一人で抱え込む必要はない」というメッセージを伝える役割を担うことができればと願っている。

開室に至るまでには、近隣の短期大学から上質な玩具を多数ご寄付いただいたり、先駆的な子育て支援を行っている大学を視察させていただいたりした。略儀ながら、ここに御礼申し上げます。



「えみくる」の様子

[共立女子大学]

大学内に親子・学生が共に育つ・育ち合う場の構築を目指して

小原 敏郎 共立女子大学家政学部児童学科教授

1 取組を始めた経緯とねらい

共立女子大学家政学部児童学科では、学科を開設した翌年の2008年度から地域の親子（おむね3歳未満の未就園児と保護者）と学生が参加できる活動（通称：「さくらんぼ」）を行ってきた。この取組を始めた目的は、保育者を目指す学生に保護者との共育（共に育つ・育ち合う）を経験してほしいと考えたためである。開設当初は参加する親子が少なかったものの、地域の児童館や図書館に募集パンフレットを置くなどの地道な広報活動や、参加した保護者の方の「口コミ」によって年々参加者が増えてきた。2023年度には3つのグループをつくり、親子

36組、年間30回の活動を学生と共にやっている。また、2017年度から学内に新しいプレイルームが設けられ、就学前の子ども（0〜5歳児）が保護者とゆったりと過ごせる子育てひろば（通称：「はるにれ」）を開室した。2023年度は年間80日程度開室し、延べ約1300組の親子が大学キャンパスを訪れ、大学内で親子を身近に感じられる環境となっている。

2 取組を通じた学生の成長、学びの成果、取組を支援する学内体制

近年、保育者には子育て支援の役割がますます期待されている。児童学科では、3・4年次の正課授業（保育・子育て支援実践演習Ⅰ・Ⅱ）において、「さくらんぼ」の活動を中心とした内容を展開している。この活動に参加する学生にとって、大学内で親子と直接関わることが強みとなっている。はじめは保護者と関わることに緊張する学生も見られるが、徐々に自然な関わりができるようになる姿に成長を感じている。彼女らの関わりを見てみると、「保護者―子ども―学生」という子どもを中心とした三者関係を経験することが、親子との関係を築くことに有効に働い

ていることがわかる。また、学生が自ら計画を作成し、実践・省察・改善というサイクルを経験することで保育・子育て支援の実践力が磨かれる。自ら計画・実践するという取組は、自分達の予想とは異なる結果、いわゆる「失敗」を伴う場合も多くある。「失敗」を受容する雰囲気をつくることや、学年を越えた話し合いを通して理由や改善点を考え、次の活動につなげていくことが学生の学びに大きく影響すると考えている。本学は「リーダーシップの共立」という教育方針を掲げており、自ら考え自ら学ぶこの活動を通して他者と協働して目標達成を目指すリーダーシップが育っていると感じられる。

2017年度から学内に新しいプレイルームが設けられたことに伴い、専属の保育スタッフのいる子育てひろば「はるにれ」を開設した。「はるにれ」では、初年次教育として1年生の見学、2年生から4年生のボランティアを受け入れている。また、2022年度からは、児童学科以外の被服学科、食物栄養学科、建築・デザイン学部の学生がボランティアとして参加できるように枠を広げた。子どもの衣服や食事、子どもたちの遊びに適した空間づくりなど、保護者との関わりの中で大学での学びについて話す姿が見

られている。また、他学科・他学部のボランティア学生へのインタビューでは、「子どもや保護者が自分のことを覚えていてくれた」「子どもとの関わりを任せてもらった」といった話が聞かれ、ボランティア体験が安心感や自己肯定感を育むことにつながっていることも明らかになっている。これらの取組を支援する学内体制としては、家政学部、建築・デザイン学部の教員で「発達相談・支援センター」を組織しており、教育支援、子育て支援、研修・研究支援に関する運営、点検、評価を行っている。

3 今後の展望

取組をひろげる・深めることに関しては、地域の子育てニーズに応じて内容を充実させていきたいと考えている。現在、大学のある千代田区から「保育士養成校による地域子育て支援事業」の補助を受け、年間5回程度の「親講座」造形ワークショップなどを行っている。これらの取組を充実させ、大学の資源をより還元できるように地域貢献に努めたいと考えている。また、学内の取組としては、ボランティアを受け入れる枠を広げることや、プレイルームをフィールドとした研究活動を進めていきたい。

[明治大学]

心理臨床の現場で学ぶ子どもの育ち

山登 敬之 明治大学子どものこころクリニック院長・文学部心理社会学科特任教授

1 医学部のない大学にできた 児童精神科のクリニック

「明治大学子どものこころクリニック」は、2021年1月に開院した。学内組織としては「明治大学心理臨床センター」の附属診療所といった位置づけになる。センターの方では、公認心理師と臨床心理士の資格を持つ教員や相談員が心理相談を行っている。また、クリニックとセンターの双方で、臨床心理学を専攻する大学院生たちが実際のケースを担当して実習に励んでいる。

クリニックでは、おもに就学前の幼児から高校生までを対象に、精神科の一般診療を行っている。心理師たちが中心になって開設しただけあって、心理相

談や心理治療に力点が置かれているのが特徴だ。なかでも、集団療法室で行うプレイセラピーとペアレント・トレーニング（以下ペアトレ）には力を注いでいる。前者は心理師が子どもを相手に一対一で行う個人療法だが、当院ではこれ以外にも複数の子どもが集まるテーブルトーク・ロールプレイングゲーム（TRPG）の会を定期的
に開催している。これは子どもの集団療法に位置づけられるものだ。後者のペアトレも、親たちを対象にした集団療法と捉えてよいだろう。

2 TRPGとペアトレ

TRPGは、ゲームマスターの進行のもと、プレイヤーたちが紙と鉛筆、サイコロを使って遊ぶ桌上ゲームである。とくに心理治療として開発されたものではないが、近年では、発達障害を持つ子どもたちの余暇活動に用いられることがあり、彼らの対人コミュニケーションや生活の質（QOL）の向上に焦点を当てた研究報告もある。当院では、心理師がゲームマスターを務め、小学校高学年の子どもたちと院生たちがプレイヤーとなつて、ひとつの物語世界を一緒に冒険する方法を取ってい

る。また、この様子を心理師と親たちが隣の部屋からマジックミラー越しに見ながら、感想を語り合うようにしている。

一方、ペアトレは、ADHD（注意欠如多動症）を持つ子どもの保護者向けに米国で開発されたプログラムだ。現在では、子どもがADHDか否かにかかわらず、親子の関係に生じる悪循環（例・親の言うことをきかない子どもを叱ると子どもは怒ってもっと言うことをきかなくなる）を断ち、家族が穏やかに暮らせるようサポートする目的で実施されている。当院では、4、5人の親からなるグループを対象に1クール計8回のセッションを年に2クール行っている。2人の心理師がプログラムの進行と講師を務めるが、ここにも大学院生がアシスタントとして参加している。

3 子どもの育ちを学ぶ意義

ご紹介してきたとおり、当院は児童精神科を標榜する診療所だが、ここで行われているのは、病気の治療もさることながら、発達にちよっとクセのある子の育ちを見守ること、子育てに悩む親の相談にのること、思春期の危

機を迎えた親子を支えることなどである。それゆえ、一般の病院とはだいぶイメージを異にしているように感じる。しかし、子どもの精神科の役割というのは、本来そういうものであるとも感じる。

ところで、当院で研修した院生諸君の行く末に目をやると、ちかく心理の現場で働くことになる彼らは、みながみな子ども相手の仕事に就くわけではない。しかし、子どもや子どもを持つ親に関わらない人生を歩む人は、ごく稀と考えてよいだろう。少子化や非婚化が今後ますます進むとしても、彼らの中にも子どもを持つことを望む人はいるだろうし、親族や親しい友人の中にも親になる人は出てくるはずである。

自分が親になったとき、子どもが育つ道筋を知っていることは役に立つ。あるいは、親になった人の身に寄り添うとき、親の気持ちを慮ることができたなら、その人の頼りになれるだろう。そんなことを考えると、心理学を学んだ院生諸君にとって、母校のキャンパスにある小さなクリニックで過ごした時間は、きつと人生の糧になってくれるに違いない。そう願ってやまない。